



蝦夷風俗彙纂 = Ezo fūzoku isan. [Series 2, vol. 10] 1882

[s.l.]: [s.n.], 1882

<https://digital.library.wisc.edu/>

<http://rightsstatements.org/vocab/NoC-US/1.0/>

The libraries provide public access to a wide range of material, including online exhibits, digitized collections, archival finding aids, our catalog, online articles, and a growing range of materials in many media.

When possible, we provide rights information in catalog records, finding aids, and other metadata that accompanies collections or items. However, it is always the user's obligation to evaluate copyright and rights issues in light of their own use.

蝦車風俗彙纂後編

十

CHESTER S. CHARD



蝦夷風俗彙纂後編卷十目次

○外事下

唐太島へ異國賊船渡來の事

擇捉島へ異國賊船渡來の事

對外亂（異國類傳數來之事）

吾太亂（異國類傳數來之事）

○不舉不

蝦夷風俗彙纂後編卷十

○外事下

○唐太島へ異國賊船渡來の事

唐太島ハ松前若狭守領地の屬島なりといへども。往古ハ彼嶋へ渡る者のもなく。同嶋の蝦夷人。僅山丹人と交易したる品を。宗谷へ持來て。松前の人と交易した。漸々寶曆年間より。松前家よて。彼嶋一手を懸け。寛政の始より。運上屋体の家居を補理ひ。輕き家來

も少々渡し。漁業その外處置をといへども。唯夏より
初冬まで。の事にて。仲秋より至れば。家來を引取。番人
体の町人三四人づゝ。爰かしあは運上屋より越年する
までなり。然るふ文化三寅年九月十一日。いづく船
とを乞ざる異國の大船一艘。彼嶋の東浦オフイト
マリヤといふ所へ懸りたす。此時ハ例の如く松前の
家來引取たる跡なり。蝦夷家一戸あり。チウラツシタ
ルといふ夷人住居たりしが。其所へ異國人共二十人
ぞり。革包の橋舟みて上り。何事よりいらん。心易き
様ふ申せども。言語分らげ。兎角まる内チウラブシク

ル。子比十七八歳なるを捕へ。船へ連行んとする故。
雙親驚きやらじと爭へば。銃炮を打懸て威し。遂ふ彼
子を無駄ふ船へ連行。其家よハ真鎰の如き板が称ふ。
横文字彫付たる札を懸置出帆し。夫より楠溪といふ
所也海岸あり。一里半程隔て懸り。其日ハ上陸の体も
なく。翌朝もしけ船三艘。革舟一艘。以上四艘へ。異國人
凡三十人石ど乗組上陸し。同所の運上屋へ來り。其内
より鎗の附くる銃炮を持し者。戸口窓等の邊を固め
す。所々四人程づく。彼銃炮を打違ふ立て扣へたり。其
餘も皆運上屋へ入り。一同ふ腰を懸。煙草を呑居たる

ゆゑ番人どもより飯を出せし。少し喰て跡をまき
散し。首領とも覺しき者。懷中より書付を出し。何りい
へども只日本商ひといふ詞のみ僅小聞えて。其餘の
言語。すべて分らば。羅紗の切を出し。商ひくといふ故。
商ひい制禁みて成うがさきよし。手真似してあらせ
けき。首領大聲を發し。外お居するをば。残らば内つ
込こみ入り。其時居合むする蝦夷人。皆逃出しけき。ども
追捕へんとせば。番人どもも逃出とせしと。四
人とも残らば。搦取なめて元船へ連行。繩を解き砂糖の入
たる茶を飲せ。艤と胴との間は穴あなへ入。蓋をして置た

ア。此番入の富五郎西藏源七福松といふものなり。夫
より異國人。運上屋及び板藏等へ亂入し。米六百俵餘。
酒數樽。煙草木綿膳椀の類。其外仕入物比諸品残りあ
く奪ひ取。運上家板藏等。合せて十一ヶ所。外ふ辨天の
社一ヶ所。神社ハ取たり 網圖合舟等迄。悉く焼拂ひて。元船
へ立戻りぬ。昨日捕へ置しオコヘトマリ比夷人。チウ
ウケシウルグ子。此時ゆるして。同十七日迄滯舟。十
八日み出帆せり。船長さ凡十五六間。幅四間。不ぞ深さ
一丈餘。兩側み大筒二十四五挺。仕懸あり。玉の鍊比様
み見え。玉藥ハ木綿又ハ革比袋み入り。食料ハ麥豆

小豆蕎麥などの粉を餅は如く製し牛は油をかけて
喰ひ番人どもふも是を與へ乘組人數の六十人餘内
ふ女も二へ有て一人の子持あり首領と覺しきもけ
三人有て赤色計長き帽子の如きもけをかぶる。白き
筒袖の衣類胸ふ銀计牡丹懸したるを着し。その餘の
者も衣類同じ仕立て色の思ひなるを着し一同
ふ股引へ黒き沓をそき銘々ふ鎌炮を持たり首領の
内一人ハ劔を帶び二人ハ腸差をさし。その餘帶劔の
ものハ見えば既ふ唐太鳴ふ斯は如き異變なりとい
つども番人四人とも不殘捕それとなり。剩へ船をも

燒捨らされたれば。松前家へ注進せざき方便もなくて。
其儘ふ成り居たるふ。翌卯年三月ふ至り。松前家より。
唐太嶋支配人。徒士格柴田角兵衛といふもの。宗谷よ
ア出帆し唐太島へ至り。初て此事を聞大よ驚き。即時
み飛脚を立て注進したるふ。其飛脚四月六日ふ松前
家へ着たるよし。翌七日出。同家よりは届書。同十日箱
館の鎮臺へ來り。

此届書ハ殊の外簡易なり。前文一部始末ハ其後追
々糺しの上記也。

翌十一日。其趣を江府へ注進ハ。此頃ハ既ふ松前家の

領地。松前西蝦夷地とも被召上て。いまざ引渡以前な
うといへども。公料ふ成たる上ハ。扱やむづきふあら
ば。此一事ハ過去たる事なきど。今異國人の仕業を考
るふ。蝦夷人ふも敢て亂妨せば。和人のみを苦しめた
る始末。何様心ありげなる所行あれバ。又もや何方へ
渡來せんも知べりらば。先西蝦夷地よて肝要といふ
所ハ。唐太の渡り口宗谷なまバ。今箱館近邊ふある所
の津輕家の入數を以て。此所を守らせんと思へども
人少し。先有合たる分八十人ふ。調役並源山宇平太。下
役小川喜太郎。其外地役の者五六輩を添て。宗谷へ遣

しぬ。扱西地の要害場所ハ。爰比ミヨリラバ。備を設く
べき所數多コレバ。然るべキ勤番也。諸侯も。早々命せ
ら。遣候様もと。江府へ申つきど。猶その至り着む迄亦
明置がたし。然るふ南部家もてハ。素より國元も千八
百。比逞兵を備置。若事カラバ。承らむと。兼て聞きし程
ふ。さらば其内一手分比人數二百五十人を。

定式の國人數。南部津輕の兩家もて五百人なるゆ
ゑ。今二百五十人を以て一手分といふ。此南部家の
人數。其後追々差遣也。然るふ其内又擇捉よりて、
當此人數東西へ配る。

當分出し。新規勤番諸侯の人數至るまでの警衛をべき由を達し。此旨具ふ江府へ申。江府よりもさまく朝議ありて。唐太嶋ハ懸隔たる嶋みて。容易く事整ふべきよもゆらざれば。先今年ハ手を下さば。宗谷より見切。彼所を初どして。地方の警衛専らふせべきよし。孰政方より促し給ふふより。則其意を得て事と謀りぬ。扱也此年四月下旬。露西亞船擇捉嶋へ渡來して。事も々々れば。則此船も。昨年唐太みて捕へられたる番人。富五郎を初皆居たり。其船擇捉へ來り。オフユトマリウタリ等。又も番屋を燒拂利尻嶋邊みて。船々と襲し

事あり。夫等を悉く擇捉一件の内ふ記す。休明光記

○擇捉島へ異國賊船渡來の事

文化四年卯四月廿三日。東蝦夷地擇捉島紗那會所より三十里程南の方ナイホといふ所へ異國の大船二艘來て大筒を放ち海岸より凡三十丁程隔て舟を繋留たるふよう先取向へぞそこふ詰たる番人の内紗那會所へ注進として來し。其途中海岸みて露西亞人六人見懸た。彼船は多分露西亞船みて有べしと申ふ付。會所詰合の官吏とも評定し。

此年擇捉掛吟味役格菊地總内下役元メ戸田又太

夫。下役關谷茂八郎兒玉喜内。其外同心等并南部津
輕勤番士足輕等詰合たり。總内ハ御用有て立返り
よ箱館へ出。此時擇捉よハ詰合せ。

關谷茂八郎同心并勤番足輕共連て。ナイホヘ赴く
途中よて間けバ。元船ハ沖合よ繫置。異國人ども小船
よて上陸し。居合せたる番人どもを捕へ元船へ連行。
漁小屋其外を燒拂たると。尚委細の事ハ追々注進せ
べき旨。戸田又太夫より此書狀。五月十四日夜箱館鎮
臺よ來る。此時正養在勤ふて。翌十五日其趣を江戸表
へ注進し。先ふ唐太騷動よ付。勤番の諸侯一手被命候

様ふと申つるべ。今又かゝる事も候へバ。猶一手を増
以上二手。早々被命候様ふと申上ぐり。又箱館町人加
賀屋宇兵衛手船。鯨魚積取て箱館より十二三里隔。矢
尻濱といふ所ふ沖掛しける内。今月六日ふ沖合三里
程隔て帆二つ掛露西亞船の如き船一艘見掛け。ほど
ち雲霧深くして終ふ其行衛を見失ひたり。全く異船
ふや。又ハ當駄の船二艘列あつたるを遠眼ふ見誤た
るふや。あらざるよし。彼船昨夜歸帆して水主の者申
たる旨。十五日の朝宇兵衛より申出たるふよう。取留
ざる事ふハれど。此事を江戸へ申上ぬ。

一五月十八日擇捉島。關谷茂八郎より書狀箱館ふ至
る。四月廿九日異國人ども。紗那の會所へ押寄せ。鎌
炮を打掛け放火し。戸田又太夫ハ自殺。其外の者ハ會
所を立退たると。はゞ。よて。殊の外狼狽したる事の
始末。一圓分らざるふより。彼島より追々歸り来る
船方。其外の者ふ尋ば。異國人ども多勢ふて。擇捉
亂妨より引續き。國後根室厚岸の地を。襲ふべき
勢ふ聞えたりといふ。扱ハ擇捉の事ハ今ハ悔とも
力なし。此上地方へ立入せてハ安ららぬ事なれバ。
歛此警衛。ハそ肝要あれ。先箱館ふ詰合たる。南部津輕

の入數の手を分。早々彼地へ遣せし。又箱館の警
衛を欠げたし。總人數何程の内。何程宛へそこへ
遣し。何程ハ箱館ふ残せし。武器玉薬兵糧も差支
ざる様。夫々ふ配るべし。扱右の人數を以。所々比警
衛ハ辻を事足るべからず。されば南部津輕の家來
を呼出し。早々増人數を差出せべき旨促し。又彼賊
船。此上何程援兵いらんも計がよし。兩家せ人數ふ
て足らざる時ハ。近國の諸侯へ加勢の事申達せ
き旨。兼て申上置をゆうといへども。其期ふ至て達
まる時ハ。遠路の事間ふ合ざるふより。羽州秋田佐

竹右京太夫。同國庄内酒井左衛門尉。臨時人數催促の書簡を認め。早馬と以て達す。其文如左。

東蝦夷地の内擇捉島へ異國の大船二艘渡來。及騷亂。國後嶋へも附寄可申報。相聞候ふ付。南部大膳太夫。津輕越中守。彼地勤番候條。今度増人數の儀申達候。然處右異國人ども追々援兵を以。此方へ押寄可申程も難計。左候へバ兩家人數おてハ引足不申候間。鍼炮組足輕大筒玉薬等支度夫々用意船みて。早々箱館へ向け被差立。右人數一度ふ揃兼候。追々ふも可差立様存候。自然異變

の節。兩家勤番人數みて不足の儀有之候。最
寄御領分の方へ可申達旨。兼て申上置候儀ふ有
之。且寛政三年御書付の趣も有之候間。此段申
達候以上。

五月十八日

羽太安藝守 印

佐竹右京太夫殿

役人中

猶以酒井左衛門尉役人中へも封書の趣申達
候間。爲心得此段申達候以上。

以別紙申達候。人數の儀。御分限高も有之候義ふ

候得共。火急の變事大切の時節故。其心得を以人
數被繰出候様存候。扱又蝦夷地の儀ハ海防第一
の地ふて。異國人ども上陸致候ても。海岸遠く相
備。重ふ火炮を以爭戰致候儀ふ付。弓鎗等よう銃
炮人數多方相當の地理ふ候間。右の心得を以用
意可被致候様存候以上。酒井家への書簡も同文
言。且兩家の返書ともふ略也。

右此如く其日の内ふ悉く手配ハなしたれども。扱江
府へ御届の事。關谷茂八郎が書狀のみみてハ一向分
らざるふより。彼地より歸うたる船方ハ。外の者共ふ

事の始末を問ひ。彼より云所を以て。菊地總内山田鯉
兵衛。北兩人。御届を取調出せし故。一覽する所。四月廿
三日ナイボへ來りし露西亞人。詰合たる番人二人。
稼方者三人を捕へ。番屋及び藏々迄焼拂たる事ハ先
達て風説の通り違ひあく。其節の様子。露西亞人共。小
船ふて上陸し。扱薪水等の用辨ふも有べきやと思ひ。
去寅年出る御書付の趣も向きバ。穏ふ取扱置し。ふ
理不盡ふ右始末ふ及び。彼五人の外ふ。和人風俗ふな
りたる蝦夷人も。六七人捕へ。船へ連行しげ。元蝦夷人
の由を申けまば。得と改たる上。彼等ハ残らず返し。五

人の和人のみ留置。夫より彼大船。紗那會所の方へ趣
く様子。ふ官吏を始。在住御家人其外一同。彼會所ふ集
る。鳴中手當届ざる所の分ハ。番人共ふ紗那へ引取。且
繫取といふ所ハ。得撫の渡口なるふ付。津輕家勤番の
者ふ。在住せ御家人と添て詰させ。所々手配して。彼所
ふ廿九日晝過。露西亞の大船二艘もせ來り。會所の前
濱へ寄せ。大勢上陸し。銃炮を打掛たるふよう。此方よ
とも打掛け暫く争戦を。内支配人陽助といふ者。内股
を打抜き引退たり。一駁彼大船へ入數百人乗組。銃炮
夥敷積來りし。此方ハ兩家勤番を始。總人數二百三

十人程詰合たきども。其内より彼藥取へを人數を分
たれバ。全く紗那みハ詰合モ。彼方の人数船もハ。何程
ゐるや知ざれ共。追々上陸したる分。凡七百人程モ有
べし。此方ハ少人數を以ての取合なれば。必死も成て
争戦し。異国人六七人を銃炮みて打殺し。其外手負た
るものもゐる。躰ふみえより。夫より夜ふ入。大銃四五
手より打うけ候内。異国人ども。會所裏手の方へ廻り
焼立たる故。今ハ防戦叶ひ難くして會所を立退。國後
島の方。ルヘツと云所へ一同ふ引取時。戸田又太夫の
跡より引しげ。異国人共ふ追掛うき。若虜とならば。外

國へ對し。本邦の恥辱ともならん事口惜して。自殺したるとの趣なり。其次第大低ハ事も分しふよう。則其儘清書して。江府へ申上たり。又別紙を添て。彼南部津輕増人數の事。佐竹酒井へ臨時人數申達せし事等。具ふ聞えあげまひらひ。

一十九日。ふハ箱館沖合。午未の方。ふ當り。凡一萬石積程。よて帆を十一掛たる。異國。廿大船。一艘見え。次第。ふ近寄り。地方より一里半。石。隔。又船を止。帆桁の上へ五六人。上り。各遠眼鏡。と以て箱館の様子。と伺ふ。躰。さやの。み見えたる故。早速南部津輕兩家の人

數。并支配向在住同心等夫々乎手當し。彼船附寄り狼籍ふ及づ。打崩さんと手配して待し所す。夕方迄汐首崎と云所乎沖掛し。夫より惠山崎の方へ船を向け。何地共あくをせ行ぬ。此日南部領大澗沖ふも此類の船見え。昨日も津輕領權現崎の方乎も見えたるよし。追々注進ゆり。津輕沖乎見えたるハ此船あるべし。大澗沖乎見えたるハ同日みて所を遙み隔たまば。若別船みて有しや計げたし。則翌廿日乎ハ。件の趣江府へ注進を。扱此船何方の沖乎掛居て。地方一附寄らんを計難し。又此船乎を限らば。か

る時節あれバ。猶類船の來らむを計ら甚ざるふ
より。兩家の人數晝夜とも陣を張。夜の篝を焚て警
衛に。

一 今度異國人共亂妨の仕方。和人ハ捕へ。其小屋等ハ
燒拂。夷人夷小屋亦ハ手も附ざる心底。全く夷人
をあづけむとする手段。必ず有べきや。東蝦夷ハ既
ふ厚く御撫育もあきば。夷人の心もたやすく傾く
まじ。それとも西地ハ是迄御國恩を蒙らば。其上松
前家舊領ふとなれたる事と。何となく本意なきや
うふ思ひ居る夷人亦も。有まじきふらうば。左のう

人所へ異國人ども來り。若彼方へなづけあバ。傾く
まじきふもらうば。されば今引渡以前なりといつ
ど。今度上地を被仰出たるより。末永く御撫育の
る趣也。よくいひさとし。酒煙草等のもせ夫々よ
與へ。厚く伏從を謀るべしと。其場所掛せ官吏ども
一促セ。

一擇捉亂妨したる異國船ハ。五月三日同所を出帆シ。
何地へ行けむかぞしハ見えざモしげ。同月十四日
西蝦夷地ルンヤの沖合モ二艘共見え。廿一日ふを
唐太嶋へ至リ。去秋燒拂たる番屋跡などを見廻り。

ルラタカと云所の番屋を又焼拂たるよし。松前の
家士どち。同所白主と云所より居たれどち。

是ハ去秋唐太一舉より付キ。家老始め百六十人程。
先達て彼方へ渡たり。

異國人大勢ふて防ヶたしとて。人數残らば宗谷へ
引取たるよし。擇捉宗谷詰の官吏どもよう告來り。
六月七日江府へ注進す。

一擇捉詰せ面々ハ。一旦國後島へ引取たるよしとて。
擇捉爭亂の次第を勧らましよ取調。關谷茂八郎よ
う申越の趣ハ。其節支配人陽助銃炮みて内股を打

津輕家。足輕一人。足。甲。打。逃。た。ま。じ。も。い。づ
れ。も。薄。手。の。よ。し。外。ふ。名。の。知。き。ざ。る。者。も。即。死。二。人。
あ。り。一。人。ハ。石。火。矢。臺。の。際。ふ。倒。す。面。駄。に。げ。て。分。ら
ず。石。火。矢。發。し。た。る。時。怪。我。せ。し。ふ。も。死。る。づ。き。や。兩
人。と。ち。衣。服。の。駄。を。見。き。バ。漁。業。稼。方。の。者。ふ。も。死。る
べ。し。と。覺。ゆ。さ。き。ど。其。事。頭。取。た。る。者。彼。鳴。を。逃。去。り
し。み。よ。う。碇。と。え。き。ぎ。た。く。又。ア。リ。ム。イ。と。云。所。北。蝦
夷。人。一。人。紗。那。川。向。ふ。て。銃。炮。お。中。り。死。た。り。敵。の。方
ふ。て。ハ。露。西。亞。人。三。人。紗。那。會。所。つ。上。陸。の。時。打。倒。し。
其。外。三。四。人。も。打。し。と。覺。え。た。ま。じ。ど。碇。と。見。留。ざ。る。由。

紗那會所燒跡みて。露西亞人一人酒ふ醉ひ。夷人ふ
對し我儘をふるまひしよより。夷人ども集り。三月
三日の夕打殺したるよし。又會所番人行十郎と云
者。五月三日夕。異國船出帆後。夷人と連れ。アリムイ
と云所の夷小屋へ立寄るふ。夷人の妹と外ふ一
人の夷人居たる故。辨當を遣そんとて内ふ入。召連
たる夷人兩人ハ。紗那會所の躰を見せ遣そし。飯を
喫し居たる所。露西亞人一人銃炮を携來りしよ
より。彼男女の夷人ハ仰天して逃去り。行十郎も外
へ出。キナと云草の陰ふ忍び居て見キバ。彼露西亞

人ハ行十郎ゲ喰掛たる飯を喰ひ所々を見廻り。頓て行十郎ヲ忍び居たるを見付。其所へ來う。頭より肩先ふ撫あろし。手袋取出し燼邊へ連行。何やらん咄し。アメリカ何々といひ。指を四つ折。ウルツブ。ふ。ホロン々々々あどい。ども言語分らば。暫く過て寐る真似をし。行十郎も寐よと云仕形なる故。露西亞人の側ふ寐轉ひたるも。頓て行十郎ゲ傍ふ置くる。脇差ふ手を掛け故。取隠しなどする内。最前紗那へ遣したる二人の夷人も歸來たり。其夜ハ四人共同宿を。行十郎ハ此露西亞人を生捕ふせぞや。

と思ひ居たる所ふ。追々外夷人ども大勢集り。是非殺せざしとひしめき。いりふ制を疋ども聞入せたとへ召捕されとむ。夷人ども大勢みて辻も助くべき勢ひふあらざる故。今ハ是非なしへて行十郎脇差を以て露西亞人の胸を刺通し。夷人共寄合打殺したる由。

一又番人喜總次と云者と支配人陽助が子與太郎と云もの。五月二日アリムイの新道を通りし。何者とも知れ。與太郎へ切掛。右の手甲一寸餘疵附う。遂。笠原をくぐり山越へ。ベツといふ所へ逃去た。

其時喜總次トモシヲ切りけたる躰トボクヲ見えしげ。此者
比安否ヒヤウフいまざ知シざる由リ。喜總次トモシの事トモシノハシ以上アゲハシの件々茂

八郎ハチロウより申來シメルり。則六月十日詳シテふ江府エガタへ申シメル。

一 西蝦夷ニシカムシ地チ。宗谷斜里邊スラリヘンへ送スルる。仕入物品々モノ。松前伊達マツマエイタツ林右衛門ヨウエモンが手船宜幸丸ヨシマツルへ積入スル。五月廿日出帆段々スル下ルり。利尻島リシマキふ澗掛スルして居たる時ハ。同月廿九日沖シマの方カタより。異國船大小二艘スモウニホウをせ來シメルり。其船オチボより橋船二艘スモウニホウをおろし。彼宜幸丸ヨシマツルへ向け頻ハタハタふ銃炮ブンポウを打掛スル。素ソより町入シマツルの事トコトコなれば。防ブシべき手當ハンドウもなく。元船乘捨スル。小船スモウみて天鹽アマニと云所トコトコ漕渡スルうたるよし。林右衛門訴スル

出る。此外先達て宗谷へ向け。御武器諸品も積入て
廻すたる。吉祥丸萬春丸と云御船。地役雇の者共乗
て出る。其安否いまとぞ知り。此船の否ハ未記則此趣

三月十日江府へ申し。

一此時安倫ハ箱館下向の旅中成しう。

今年ハ西蝦夷上地の事より付。江府より御用有之。例

より交代の時節たかつり。

先達て擇捉島へ直乗として出帆したる水主。同心
長谷川沖右衛門。雇醫師新樂閑叟と云者。東蝦夷地
根室迄をせ行しう。擇捉騒動の事を聞。何きも彼島

一渡り見届べきと。猶又海路を急ぎ。國後島まで廻
至て様子聞けば。そや擇捉ハ落去せしといふ故。然
うハ往とも詮あし。此上ハ片時も早く。箱館へ注進
せむやと乘戾たりしが。風順ぬしく佐井港へ着。箱
館への風待して居る内。此兩人より安倫旅中。擇
捉比次第らまし聞くる趣を申越。五月廿三日安
倫より江戸へ注進り。其外南部領沖合異國船見え
たる杯。旅行先へ所々よう申出するよう。其事并
佐竹上杉。臨時人數被仰渡可然ふ。品々江府へ申
出しどぞ。

正養あり佐竹酒井へ人數の事申達したる事。安
倫ハいまと知らば故ふ本文比如計ひたり。

一先達て諸家へ申達しある人數の事。佐竹家への書
簡ハ五月廿四日國元へ着。直ム翌廿五日より人數
出張。追々箱館へ着到の總人數五百九十一人。酒井
家へ廿六日より着。六月朔日より出張。追々到着の
總人數三百十九人。南部家の増人數達しハ廿二日
翌廿三日より出張。追々到着の總人數六百九十二
人。外ム定式の人數二百五十人。都合二千二人あり。
此家々何處も怠りぬしといづれ。別て佐竹津輕

ハ。書簡到着の翌日直ふ人數を出し。中ふも佐竹ハ
不意ふ達したる事なる。神速なる計ひ家柄とハ
云なぐら。格別ある事なり。則此趣委細ふ記して江
府へ申す。扱此人數の配り方。箱館ふ南部勢三百四
十人。佐竹勢五百九十二人。砂原ふ見張の爲のみ
よ。南部勢三十人。浦川ふ同家の勢百人。厚岸ふ同家
の勢百三十人。根室ふ同家の勢百三十人。國後ふ同
家の勢三百八十人。松前ふ南部勢百三十人。津輕
勢三百三十人。酒井勢三百十八人。

着到三百十九人の内一人病死なり。

合せて七百八十一人。アサシワふ津輕勢二百人。宗谷ふ同家の勢二百三十人。斜里ふ同家の勢百人。各武器玉薬兵糧等厚く用意して備たマ。

一六月十一日安倫箱館ふ到着。日々ふ會合して品々議論シ。

一先ふ安倫正養より執政方へ申出候る。注進狀の御返簡追々ふ來り。入數の事を安倫が申ふ依て。松平政千代佐竹右京太夫へ達給ふといへども。

不安倫よりハ。佐竹上杉と申つるゲ。御評議ふよつてかく成しと見えたり。

佐竹家へハ家早正養あり達し。人數出張したる由
付。此上人數ハ箱館奉行より。猶申旨あらば出そ
べし。仙臺家人數ハ五百人程揃置。是モ箱館より
沙汰あらバ。速小差向べしと促し給ひ。猶又南部左
衛門尉一モ品ふあり。人數差出をべき旨達し給ふ
由。且非常の時。奉行旗持せ。せしてハ不都合ふも有
べきあれば。用ふべき。其外品々仰下さる。餘ハ略之。
一今度の一舉ふ付。若年寄堀田攝津守正敦朝臣。大目
付中川飛彈守忠英。御目付遠山左衛門景晋。御使番
小管伊左衛門正容。村上大學義雄を遣され。追々箱

館へ至るべき旨執政方より仰下さる。

一六月十九日。宗谷詰調役並深山宇平太より書狀來
す。先達て異國船へ連行たる唐太番人富五郎酉藏
源七福松。擇捉番人五郎次左兵衛長内六藏木挽三
助。外ふ擇捉ふて捕へたる南部家火業師大村治五
平。都合十人の内。五郎次左兵衛留置残る八人ハ國
後島より小船ふ乗せ歸したるやみて。六月六日宗
谷ふ着き。彼國より書簡一通送り。表ハ彼國の文
字ふして。旗の圖などをも画き。裏ふハ片仮名を以
左の如く書たす。此文字を見安らんが爲

ニ被成候
ナサレソロユヘイヘンハシメテコノモ
トノテンカサマヨリヲホキクシテラタ
チテアキナイテモナクハア力ヒト同様
ウニカラフトトナ此ラ文ス詳ソレニヨツテサイシ
願ひて置候得ともソラヘトモキハウケナ
子カイテヲキソラヘトモキハウケナ
クソレユヘコノ夕ヒコノモトノテナミ三
セ申夫故此度此元の手並見ナミ三
モウシソロテキカナイトキニハキタノ
チセ申候上可申候アケモウスヘクソ
トナラフコトナラフコトナラフコトナ
地取アケモウスヘクソロテキカナイトキニハキタノ
トトリアケモウスヘクソロテキカナイトキニハキタノ
トトリアケモウスヘクソロテキカナイトキニハキタノ

ラ ら
ハ へ ンシノタヨリニテモスミマスコト
返事の便りもても濟ま先事
メ ノ候ヽイヒテテツツニムラ
ノタロ 口ノヲフ御座候カラムと又ハ鳴々うる
ヽサ左易筋追散赤人行れ
タ澤ヤ 様叶シテアカヒトツイイカレマスニヨツフル
サ山ゴ無致シラシテヤリマスマタハコイ子力
ンムサ"御ナハセソウラハマツダ代心
ニナ座タシタクコハマツダ代心
ツ遣ク度候ラハマツダ代心
カソ候コハマツダ代心
ワシ得心口力掛未
コあハ口力挂未
ノのマ又ケニム代心
ゴ如タニコ御サ座ニム代心
トク々ニムフ船サ座ニム代心

致 し 可 申 候
イ タシ モウスヘクソロ

月 日 才 口 シ ヤ

松 前 御 奉 行 さ ま
マツツマヘヲブギヨサマ

此文章を異國人の首領ミカライサンタラエチヒ
云者。日本詞を記しある小冊を所持し。其内より撰
び出して詞を作り。唐太よて捕らる源七と云もの
ふ。片仮名をもつて書せらる由。此度歸りたる八人
の者ハ。下役小川喜太郎差添箱館へ出づき。其時書
簡の本書ハ持來るべしとて。先寫を差越せ。

此八人の者追て詳ふ末文ふ記を。同の大貢車頭
共糺問したる申口を。異國船大の方四十人餘。小の方
古二十人餘。合て六十四五人も何るべきよし。此二艘
の外當年渡來の事ハ。番人共聞及ぞ。紅毛イギリ
ス等。商船の出居る趣ふ聞たるよし。此異國船乗組
の者名前左の如し。

大船の方首領

ミカライサンタラエチ 三十二三歳

下役

ヒヨウトロマルキチ 三十歳

イワニヤトルエチ

七十五歳

船頭

ヒヨウトロヤワノエチ

三十四五歳

商人

ミハラエチミツ子コウ

四十歳 程

小船の方首領

カフリウハイハノエチ

二十四歳

右異國船。當年ももや歸帆もせづきやの趣み。番人
共聞たるよし。宇平太より申來り。其始末并書簡の寫
等。即日江府并正敷朝臣の御旅行先へ同心大貫專助

天野喜左衛門。早馬を以て注進也。

此早馬正毅朝臣。日光御旅行先へ。六月廿四日ふ
達し。江戸へハ廿六日ふ達し。二百里餘の行程七
日半ふ達し。格別神速比由を以て。御慶美として
銀二枚づ。外ふ箱館御入用の内より。金三兩づ
共。取らをべき旨。大炊頭利厚朝臣のたまふふよ
き。村垣定行計之。

一先ふ宗谷へ向。出帆したる御船二艘の内。吉祥丸ハ
事なく彼地ふ着。萬春丸ハ武器其外品々積入。地役
雇の者。森重左仲内野五郎左衛門上乗し。利尻島の

内ふ。繫居たりし折りら。五月廿九日沖の方ふ。大筒の音頻ふ響き。異國船渡來したるにて。同所ふ繫居たる商船共騒ぎ立。其内伊達林右衛門が手船宜幸丸へ。異國船より銃炮を打掛らまされば。乗組せ者共傳馬船みて逃來り歎き申ふよう。萬春丸の水主共一同ふ狼狽し。我ちくと舟舟みて逃去り。いふ制止め共聞入ざる故。是非なく左仲五郎左衛門も。武器内。百目筒一挺。三十目筒二挺。十夕筒四夕五分筒三挺。胴亂五つ。其外火繩口薬等。漸ふ舟舟へ積入。三里を乘出し跡を見りつきば。利尻の方ふ當つ

て。大ふ煙立ゝる故。萬春丸ハ燒拂それゝる事ふも
有べきやと。六月朔日此兩人宗谷へ來りて申ける
由。翌二日ふゝ萬春丸の見届として。兩人共合圖船
みて乗出したるふ。沖中みて風變々れバ。ノツシヤ
フと云所みて風待し。同六日跋海といふ所迄至り
し。異國船より戻されたる番人共ふ行合ひ。萬春
丸の事を尋きハ詮なして。其儘宗谷へ漕もどりう
たる由。彼利尻を立退時。萬春丸ふ殘置さる品々ハ。
徒具足二領。同心具足八領。五百目大筒一挺。四爻五
分筒二挺。合藥十五貫目。鉛二十貫目。米三百五十俵。

味噌三十樽。醤油三十樽。酒二十樽なり。是等を異國
船へ取らしや。燒捨らしや知らざるなり。六月
廿八日江府ふ申そ。

一かくて六月廿八日比夜ふい。彼異國船より戻され
たる番人七人と。大村治五平を。小川喜太郎。率ひ
て箱館へ到着したり。翌廿九日一同呼出し糺問せ
る。去年九月十一日唐太島亂妨の始末。及び同所
の番人共々捕きたる事などハ。前の唐太一件ふ記
したるが如し。船の大きさ。鎌砲の様子。人物比模様等。
詳ふ唐太一件の内ふ見えたる故不贅。夫より此者

其ハ彼船中ふ在て。麥豆小豆蕎麥などの粉と餅の
如く製したる物を。與へらきて命を繫ぎ。九月十八
日み唐太を出帆し段々とせ行。十月十日ふ露西亞
國東察加近邊まで至りしげ。風順よからずして滯
船し。漸々十一月五日。至り東察加の内。ヘトロハウ
シユイと云港ふ入。潤掛して居る内。水主五六人づ
ゝ日々上陸して旅宿の手當し。同月廿日過一同ふ
上陸して。彼四人のむ北ハ。同所の飛脚屋カフリウ
ハメエケンアチキリフウヘルと云者の方を旅宿
として。四尺四五寸ふ七尺餘も有べき一間なる所

ふ一同住居し。疊ハなく板敷ふて。唐太より持來り
し薄縁を敷。彼船ふ乗組居たる。鍛冶オウセミマキ
セムエチヒフウロウと云者。晝夜附添て世話し。首
領より差圖のよしハ。唐太より取來きる米を。日々
四升程づゝ受取。玄米のまゝ飯よかしき。鮭の鹽煎
などをそへ物ふして。朝夕二度づづ給させた。然
るふ或る時。宿の妻女彼煮たきをる鍋ふて。足を洗
ひたるを見附。ぬまうむさくるしき故ふ。彼附添の
者へ談じ藥罐を借りて。手賄ふして。飯も玄米ふて
も食ひふくきふより。桶をかゝ少しづづ搗て用ひ

たゞしげ。ある日首領三カライサンタラエチ見廻
ふ來り。是を見て米といふをもぞと尋る故。米の
皮ぬりてハ。腹ふりこす給ふくき故。日本みてハか
くして用ふと答けきバ。然うバ左致せよとて歸り
ぬ。此所野菜の類ハ一切なく。魚鳥類又ハ牛内を赤
人共ハ常の食とひ。米も少しひきども飯よかし
く事なく。たまく粥もして食ふ。其米ハ古米の如く。
至て軽くして風味惡し。首領比旅宿彼等居所よ
り一軒置たる隣みて。四間ふ六間程の家なり。硝子
窓拭ぬり。疊ハなくて物ふ腰を掛て居ア。卧毛時ハ

木綿布團ふ。鳥の毛を多く入たるを二つ敷き。其上
へ卧せハ左右折きくるある。其上蒲團一つを掛け。
枕も木綿ふ。鳥比毛を入れて。長く縫ひたるを三つか
さね。中くぢみて顔へくるま。枕元ふを。剣并鑓の
付たる銃炮を掛置た。四人の者共日々此旅宿へ
呼き。砂糖の入たる茶。并麥蕎麥粉を。餅の如く乞ふ
るを給させべる。此所家數三十餘戸。皆山海の獵師
なり。商家ハ唯一戸みて。革類反物穀物茶蠟燈油。其
外品々をひさぎ。反物ハ羅紗。更紗。天鷲絨。木綿類な
リ。爰ハ露西亞國の内比田舎なる故。よき品をなし。

といふ。此地一圓海岸みて山もあり。海岸みや土手を築き。大筒五六挺或も十挺程づゝ仕掛けたり。鎗炮車臺打入る藏ニ棟。焰硝藏一棟。穀物の入たる三棟あり。此藏々并首領の旅宿へ。足輕やうは者一人づゝ。蝦夷刀比如くなる抜身を以て。晝夜とも警衛せ。露西亞ハ寒國と聞しが。此地ハ左様みゆらば。却て唐太嶋あどようハ凌ぎ能方なり。寺も一ヶ所あり。住持も總髪みて筒袖の衣み似たる物残着し。袈裟を掛。妻帶肉食なり。俗家みや釋迦の像み似たる者を板上書き朝夕拜せ。又牛ハ餘程あり。日本

の牛ふ變る事なく。少し小さき方なり。荷物の用ふ
ハ遣そばして皆食料と。犬も日本の犬ふ變らば。
雪車を挽うせて用哉ねり。猫ハ至て拂底なり。鳥類
を數多あり。馬ハ一向ふなし。オホツカと云所ふハ
少しひまども。荷物の事せみふ用ひて。乗る事ハせ
ざるよし。味噌ハなく。醤油ハぬまど拂底なり。酒ハ
焼酎の如く至て強し。去年十二月十五日。大船の首
領ミカライサンタラエチ同道みて。東察加比代官
の所へ行。其月の廿九日ふ立歸りしげ。當正月中旬
頃ふ至り。東察加の代官。ハヒヨウイハノエチヒ云

者此地より來り。ミカライサンタラエ。其外の者も。
渠カ旅宿より行体なり。其翌日より至り四人の番人。彼
代官の旅宿へ越せべきよし。ミカライサンタラエ
チゲシゲいふより。參りたるより。上座より代官其次より
ミカライを初。其外船中より乗組たる足輕以上の役
人共。何きも床机より腰を掛け。入口より足輕三人。鎗の
附たる銃炮を持て守りたる。其時代官四人の番人
と對し。ヒサシイ々々々々といひけきども。何事より
や分らぬ。夫ありミカライへ向ひ。此者共ハ當國の
詞を覺えたりや。酒とのむやと尋ぬ。詞を少しハ覺

え。酒のむよし答へけきば。あらうらば代官持參の
酒なりとて。一盃づゝを呑せ。やうて彼面々品々談
じの体みて。足輕百人も連行べしと云ける時。夫ふ
も及ぶまじ。船ふ在合する人數みて。事足なんと答
へたるをば。聞取たまども。其餘も知まじ。此者共去
年中あり。露西亞人ふ交り。言語も少しあ通じ候故。
是程ハ聞たす。此代官三日逗留して歸すたり。此者
ハ去る年長崎へ使節ふ來りたる。役人せ兄のよし
ふ聞う。又或時三カライサンタラエチゲ方へ行し
ふ。日本みてハ何品を好むや。金銀鍔羅紗の類を何

るやと尋し。又金銀鍍銅の類ハ潤澤なり。毛類
ハ日本之産非き。長崎にて交易して萬欠事な
し。その外絹布織物などハ結構なる品多く有て。聊
も不自由なけり。何品好むといふ事もなし。と答
へける。又日本人羅紗を衣服させば暖なる上丈夫
みて然る。と申ふ。日本ハ暖國故毛類を着
る事なし。只合羽火事用る也。みねうと答へたり。
彼國みて何品を好むや知らざれ共。米鹽味噌絹
類拂底みて分て海氣と尊ぶ脉見えたり。扱又我
輩を捕へし。何故かと尋し。去る年長崎へ漂

流人を送りて。使節を遣し。交易の事を願し。其事
叶そば。以來船を寄も。燒拂そんとの事なる故。成べ
き程ハ日本を燒拂。彼國のへをも捕へ來キ。國王
の命ふよう。唐太の一舉ふ及びしと答へしより。
いりで日本ふてハ。さをあすせ不法の所置ハゆる
べき。そハ全く其國の聞違ひなるべし。日本へハ其
譯聞えず。今度の仕方ひたまう。海賊の所行とはみ
聞えしと申々きバ。さればとよ亂妨の事。素より本
意ふらうば。交易の願ひ叶ざる故。止事を得ざる所
なり。全く海賊筋ふらうざる證據ハ。彼奪取たる

品々燒拂たり。家藏船等ふ至迄巨細ふ記し置。通商
整ひたる日ふ至らば。悉くつぐのあがきよし。國王
の命ねうと云て。暫く思惟したる体なりしげ。然ら
ば通商の願書を遣せばし。されど露西亞文字を讀
難うるべなれば。日本の詞を。日本文字ふて裏書す
べしとて。青き紙を取出し。三カライ則筆を取て表
書認め。夫あり日本詞を記したる小冊を取出し。其
内より撰出して。一々々々ふ詞を作り。此通り日本
文字ふて認よと云故。源七やゲテ片假名を以て裏
書し。よみ聞せたるふ。宜しき由ふて受取置ぬ。前ふ

たるハ則此書簡なり。夫より四五日過て。又二枚裏書せよと
いふ故。何故ふや問へバ。一枚ハ本國ふ遣し。一枚ハ
三カライケ扣ふむるよしいふふより。則又二枚認
め。外ふ源七ヶ手覺ふ一枚認あきぬ。

此覺の一枚ハ源七ヶ荷物内ふ入置し。何方ふ
や失ひたるとのふ。

夫より四月三日ふ至り。去年唐太より歸帆したる
大船の方。三カライサニタラエチを始。四十二三
人乗組。四人の者共をも皆其船ふ乗せ。小船の方一
ハ。カフリウハイハノエチを始。三十二三人乗組。其

日ふ澗口の外へ乘出し。日和を見合。同七日ふ至り。
順風みて二艘とも出帆し。段々とせ行。同月十八日
九日の頃ふそ。得撫島へ着寄べき心構みてらまし
く。十九日の夜より大風雨ふなり。いづくともなく
もせ行。廿日は朝ふ至り。大なる海岸へ着寄たれど
も。小船の行方知きざる故。或ハ乘戻し。或ハ艤船な
ど出して所々を尋。廿二日の夕方ふ至り。漸々小船
と一所ふ成候へども。廿三日の朝又彼海岸へ着寄
る。船頭水主等上陸して。土地の様子を見る。ふ船と
作どたるや。材木板などハ何ほど。濱邊ふ人も見え

ざるよしみて。旗一本持歸う。見れバアツサノボリ
大明神と書。下ふ總兵衛三助作之助太郎助豊七左
兵衛長内と記したり。扱ハ得撫へ行心掛成しげ。彼
島ハいつく乗をづして。爰ハモヤ擇捉なりとて。其
日ハ同島の内。ナイボと云所の海岸ふ懸り居。廿四日
の四時頃ふ至り。小舟の方より首領カフリウハイ
ハノ卫チを始三人。番屋へ入て腰を掛け。帳面と覺し
きを出しこれを出し。何やらんいへども。其所ふ詰合たる
番人共ふ言語通せば。只日本と云たる事のみ分り
たる。きせるとかせと云如き真似せる故。番人左兵

衛煙草きせるをかしけせば。やうてたゞあを呑居
のみみて。様子ハ分らば。飯を出しなれば。濱の方へ
持行手を以て撮み喰ひ。又そあみ鱈の干で有しと
見て。くれよといふ手真似を見る故。筵。一盛與へた
モ。又其所ふイタニシノと云蝦夷人の居たりしが。
頓て其者を連て。一同ふ元船ふ返り。イタニシノへ。
鎗炮一挺玉一つを與へて歸しける故。異國人何用
をう申つると尋る。何やらん申なまども分らば
といふ。帆船中居る所の唐太番人共。露西亞人共。此
所ふて何事を力せらんと。心ねらば思ひ居る内。其

日の八つ半時。大船より首領を始。二十人橋船より乗
り。何處の場所へう上陸し。夜より入元船へ歸り。家八
十二軒有ども。人ハ居ざるよし。油一樽三味線
一挺。薄縁一枚。鮮魚少々持歸り。その夜ハ二艘共同
所み掛居たす。板もナイボみてハ異國船渡來みよ
つて。紗那へ注進の飛脚を出し。又々来るべしとて。
用心し居る所み。廿五日より至り大船の方より。首領
を始十二人。小船の方より首領を始十二人。ナイボ
へ上陸し番屋へ押入。番人五郎次左兵衛長内六藏
木挽三助。一同より搦め橋船より連行。藏より有處の米二

十三俵。木挽鋸大工道具等。并仕人物の古綿入四つ。
白紺の木綿二三反つゝ。其外番人共の所持の衣類
夜具脇差等奪取。番屋所々火を掛け。一同元船へ歸り。
捕へたる番人共ハ繩を解き。砂糖の入たる茶を呑
せ。唐太の番人共ふ二所ふ置たり。廿三日大風雨ふ
て。二艘同所ふ掛。廿七日の朝出帆。子丑の方へもせ
行しみ。オイトと云所の沖みて。日本船一艘見ゆる
由みて。番人どもハ穴へ入置。

艤と胴の間を穴といふ。そあへ入て上より蓋を
也。

頻々銃炮の支度などある様子み付。而もれ日本船
無難ふ可達かしと。一同神佛の祀ぎ事して居たる
内。俄ふ卯辰の風強くなり。彼船を見失ひたるよし
を申ふよ。各心を安んじ船行ける程ふ。廿八日ハ
雨降風強く。頻々丑寅の方へせせ行。廿九日ふハ紗
那の沖ふ至り。四時頃海岸より一里程隔。大船掛。半
里程隔て小船掛れり。頓て大船より。首領を始二十
人ほど。橋舟ふ乗組上陸し。小船よりも八人程乗組
せしが。風烈くて陸へ寄がたく。元船へ戻たり。夫よ
里陸地みての始末ハ。いづく有しやあらば。七時過

より至り。濱邊より五六ヶ所火の手見え。間もなく大船
より上陸したる者も。元船へ歸来るより。三カラ
イサニタラエチふ。紗那の様子を富五郎尋し。通
商願の書簡を持て上陸し。露西亞の禮なきバ。筒先
を空ふ向て銃炮を打しげ。日本の方より銃炮を打
掛たるより。止事なく此方よりも打掛け。日本人五
六人も打殺し。味方みち手負三人引きども。薄手な
うと語し故。火の手の見えし。いづと尋ねれば。
引きもこあく。あり焼たるふもあらば。一同引取し
跡みて。燃立たりと答へたり。

此銃炮せり合ひ。ケ様よりあらで。初ハ赤入の方
より打掛けする由。燒拂の事も。津輕陣屋ハ敵より取
切らきて。都合惡しとて。此方より焼拂たれど。其
外ハ皆彼等が方より焼たるよし。末文擇捉より
歸たる同心ども。之を申口より詳なり。番人どもハ始
終船中よりのみ居る故。陸の様子何事もあらば。彼
同心共に申口の條より。陸の次第ハ委しく見えた
事。

其夜ハ二艘とも同所より掛り。翌五月朔日より。大小
の船あり。凡四十人許上陸し。大筒を打掛け。一同より大

聲みてオウ々々といへば。船中みても同じく聲を
合せ。夕方より品々積入歸船したり。其品數の凡
を見るよ。大船の方へ取入たる。酒五六十樽。米三十
俵程。臭足五六十領。弓六十張。長柄二十筋程。并百目
以上と覺しき大筒一挺。二三百目の短筒百三挺。小
筒三十挺許。金丸籠の纏一本。旗幕等も見えたまど。
數い聴と知しげ。金屏風二雙。十手一本。大小三通り。
脇差四五十腰。玉箱一つ。火繩。并衣類枕類等なり。小
船の方へ取たるハ。二三百目の大筒二挺。小筒十挺
餘。長柄二十筋許。臭足二十領。矢箱二荷。玉箱一つ。脇

差十四五腰。其外酒類椀類等も見えたり。
御武器ハ成丈持退し。猶殘るを有るべをきど。
今爰云所ハ多分南部津輕家の道具と見えた
す。

此諸品を持運びしハ。朔日の夕より二日の朝迄な
す。同日四時頃。紗那處々火手見えたり。又其夜
八つ時頃。ふちや有けん。船中よて助けられよとい
ふ聲聞えける故。番人共目覺誰ぞと問へバ。津輕家
の足輕ある。紗那よて捕をきたるといふ。此男一
眼みて。顔を一圓水ぶくきの如く。よ腫き。至て見苦

敷牀なう。翌朝より至りミカライサンタラエチ是を
見て。此者何しき病あきバ。船中より置がさしとて橋
船より乗せ。ミカライより書付を渡し。此書付擇捉の
役人より渡せばしと。いひ含める様子より陸へ送り
歸したり。

此書付ハ。後より擇捉より殺したる赤人の懷中より
有しとて。在住平島長右衛門より差越。江府へも
申上ぬ。是則先より源七ヶ裏書したる書簡三通の一
通なり。又此足輕の事。津輕家へ達して。さまく
おせんざくをきど行方あれど。いりよして赤人

の懷中より書付ハ有けんいぶうし。

又水主イワシニカライといふ者。紗那ツ上陸の時。
手を負ひなやみ居たるを。帆柱へ縛り付置くる故。
いふあきバ手疵なる者と。かくはむるやらんと。三
カライサンタラエチ。源七尋けきバ。日本人を殺
をまじと。兼ていひ付置たるを用ひ。此方より差
圖もせざる内より。銃炮を打掛たる故。斯の如く仕置
きるよし答つたる。

是を以て考きバ。前は銃炮せす合ハ。彌赤人の方
より。始たる事と見えたり。

夫より三日戌夕七時頃。兩船とも紗那港出帆し。翌
四日戌亥の方へもせ行。船中みて三カライサンタ
ラエチ源七ふ云様。十餘年以前。露西亞國の者得撫
島みて破船し。彼島へ上陸して未歸らざるふよう。
行て糺さんと思はる。そからげも擇捉へ着たす。然
るふ彼所ふ露西亞人の衣類碇などあり。彼者共を
バ日本の役人殺しこうと北噂を聞り。今船中ふ捕
へ置たる擇捉の番人共ふ。此事を尋よといふ故。則
五郎次ふ尋しふ。碇ハ先年得撫へ渡りたる官吏。富
山元十郎深山宇平太携來て今擇捉ふたり。衣類ハ

先ふ露西亞へ漂流したる日本人。南部牛瀧村繼右衛門等。彼國より貰ひ來れるなりと云故。其よしを三カライサンタラユチへ答けるふ。日本人ハ偽のみ云て信じがこしいづき得撫島へ渡りて實否を糺すべしといふ。彌日本入赤入を殺したるふ決しないば。唐太番入四人も殺さるべしと。富五郎源七より堅く詞をつづひ。得撫へ向て行しげ。風順よからば所々よ滯船し。七日晝頃漸彼嶋へ着寄り。赤入三人上陸し。間もなく二尺よ六七寸許の板よ横文字書たる物を持歸り。先年渡りたる露西亞人の内。三

人ハ病死し。残モハ彼島を立退ムるよし書付有り。
彌源七ヶ申せし如く。日本人の殺したるモハ勿ラ
ビ。和人も偽のみヘビ。源七ヶ言ハ偽なして。ミ
カライ疑を晴したり。夫より十二日迄沖モまぎり
居。其日の晝過。國後島アトイヤの邊モいた。暮頃
より寅卯の風ふなり。酉の方へそせ。夫より日々處
々の沖をモせ行。十八日暮頃モ至り。唐太嶋シレト
コの海岸モ。一里程沖モ掛リ。翌十九日比朝。船頭
ヒヨウトロマルキチ。その外の人數ハ聴と知らば。
同所ヘ上陸し。間もなく蝦夷人十人許連來リ。大船

へ乗せ酒を呑せ。富五郎源七も彼夷人ふ逢べしと。
ミカラライサンタラユチギいふふ任せ。行て見るふ
皆知たる夷人なる故。唐太嶋の様子を尋けるふ。去
秋富五郎等ゲ捕ミたる後。富内と云所の番人三
人越年して居る故事のよしを告たミども。未楠溪
亂妨跡の見分もなく。當春ふ至り。松前より支配人
番人等渡海し。初て其事を聞。仰天し巨細ふ様子を
問ひ糺して。宗谷へ乘戻したりといふ。夫より夷人
共ハ歸り。ミカラライを始め。同所へ上陸せんと支度
し。富五郎源七も參度思フ。參るべしといふ。任

せ。則。兩人も俱。上陸せし。其時赤人の内より水
主一人逃去り。追掛みき。山深く入て知き。是を
露西亞人。ふらう。アメリカより來う居る人のよ
し聞えぬ。夫。より一同。同所の酋長ユラトコマツ
力と云者の所へ立寄りたる。ふよ。富五郎源七よ
り。彼酋長ふ嶋の様子を尋る。當春松前家より下
すたる支配人。其外疑惑残生じ。去秋番人共の捕ま
しも。夷人共赤人ふ馴合。手引したるあるべしなど
いふ故。一同迷惑し早々番人を下し。是迄の通り介
抱ふねづかり。漁業したきよしと。松前へ小使蝦夷

を遣し。願出たるよし。又宗谷へハ。公儀の御役人を
大勢。殊ふ唐太のミラタテへハ。松前家士右來達る
なりと咄し居る内。ミカライ彼酋長。酒を呑せ。四
尺程なる緋羅紗と銀にて作りたる國王の像を與
へ。外ふ四五寸四方の紙へ。横文字書たるを渡し。此
後赤人船多く參るべきふより。此書付出し見しべ
し。左からハ米酒切類何よても。望の品を與べしと。
懸ふいひ含め。外夷人共へも。玉類切走類など。少し
づ。與へタるふより。富五郎源七密ふ彼酋長と傍
へ招きたとへ赤人より何品を貰ふとも。必從ふづ

のらば。此由外夷人どもへも。よく申會べしと巨
細ふ云諭し。一同ふ此家を立出。又もやライシヤモ
と云酋長の所へ立寄。酒を呑せ。切類などを與へ。夫
より一同濱邊へ出。的を立。鎗炮を打て夷人ふ見せ
る。ミカライハのこす。あしく。其餘の者ハ皆中り細
のなう。又夷人の飼置たる熊の子と二足所望し。鎗
炮ふ打殺し。船へ積入食料とい。夫より一同元船へ
歸う。夜ふ入乘組の者へ夥しく酒を呑せ。何達も醉
卧たる時。ミカライサンタラユチ艤の方へ廻う。大
鼓を烈しく打なれバ。醉卧たる者共一同ふ起立。櫓

へ上う銘々鉄炮を打拂ふ。此手廻し至て速のなり。
其日別て手際よきものハ賞し。不手際なる者ハ其
輕重ふ隨撻つと二三十より四五十ふ至る。折々此
事をして調練せしむるなり。翌廿日ふハ大船の方
より。ヒヨウトロマルキチを始十人。番人福松も乗
組。小舟の方よりも五人程。いづれも橋船みて乗出
し。唐太の内ヤハンベツと云所へ上陸しける。夷
小屋ハ三戸ぬほども入ハ見えば。其夷小屋の前ふ
杭ありて。少ざき箱を懸置たり。ヒヨウトロマルキ
チ其箱を卸して。中より銀ウ硝子の如き玉と。切達

類を取出し見て又箱より入。猶其上へ切き類を少し
足して納め。元の如く杭へ掛置たり。其様彼者共去
秋此所へ來りし時。掛置たる箱よりもかるやと見
えたり。いゝある故斯しつるや知度也。又彼蝦夷小
屋より。鴨々と云酒に入る器を三つ取出し。酒を一
升程づゝ入。濱邊へ杭を三本立。是を掛たり。前の箱
此鴨々杯ハ夷人へ與へる心みてもゐるや。其子細
聞ざる故よ知れど。夫より一同元船へ戻モ。翌廿一
日みハ。未申の風みてそせ。同嶋の内オフイトマリ
と云所より。ヒヨウトロマルキチ。ヒヨウトロヤ

ワノエチを始。其外何人乗組たるや知れど。同所へ上陸し。番屋一軒。雜藏一棟。物置一ヶ所。燒拂ひ。元船へ立戻り。又晝過ふなりて。楠溪海岸より半里程沖ふ掛り。船頭水主八人。并源七を上陸せし。蝦夷人一人も見えば。濱ふ圖合舟一艘引上り。長さ一尺五巾七八寸。可らむと思ふ。真鍔の板び様をみよし。へかふせ置たり。文字ゑり付有しやいなや見届け。是も赤人共。去秋來りし時の業ならん。夫より直ふ一同元船へ戻りたる所へ。エモニカイホトタラリシオケエンタルと云。蝦夷三人圖合舟ふ乗り。源

七等を尋て元船へ近付たる。三カライサンタラ
エチが見付。頓て元船へ乗移して酒を呑せ。唐太の
番人共と呼び迎ふべしといふ故。面會しいゐなる
事みて來りしと問へ。異國船渡來お付。夷人共一
同山へ隠匿。なども源七を見掛。懷しく思ひ尋來
きりと云故。唐太擇捉の番人。并大村治五平等。異國
船ふ捕をき。今日ふ及たる迄のやらましを。五郎次
ふ認させ。宛名ハ唐太支配人平兵衛と記したる書
狀。エモシカイホが脊中へ密ふ押入。早々松前へ届
けよといひ含め。

此書状松前より差出し。執政方つも内々見せま
ひらひ。下見せ資中。春の申入早々赴前。函
頃て夷人どもハ。酩酊したるより。イハンシベーロ
エチ送りて陸へ返したり。其夜同所の沖より掛う。翌
廿二日の晝頃。ルウタカ海岸より一里程沖より掛う。
三カライサニタラエチを始め。二十六七人上陸せ
しげ。間もなく火の手見え。七時頃より大釜五つ
持歸りたる故。其様子を尋ねしも。番屋二軒。藏九棟
辨天拜殿焼拂たるよしを申ひ。廿三日より廿八日
迄ハ。或ハもせ或ハ滞船し。廿九日至り卯の風もて

もせ行たるよ。終ふ見馴ざる山ひとり見え。何地と
古辨へざるよ。阿キハ禮文尻あるべしと。三カライ
サンタラエチゲいふ内。靄晴てよく見きバ。禮文尻
みて。番屋杯幽み見えたす。その時ミカライ大よ笑
ひ。源七等ハおのきび國をあらば。我ハ遂ふ見ざれ
ども。繪圖を以て知きりとて自負したす。其日七時
頃。日本船見ゆとて番人どもをハ穴へ入。人數何程
う知らひ。橋船みて乗出し。暮頃鎌炮の音烈しく聞
えしづ。頓て晦日の朝ふ至り。橋船四艘みて。千石積
餘と見ゆる大船を挽來り。其船ハ宜幸丸と題した

る大船なり。米五百俵程。酒十四五樽。衣類少々。元船
ふ積入。六月朔日。ふハ鹽三十俵程積取。猶殘たる鹽
其外の品も有るやと見えしが。其日。此晝頃。此船を
燒拂ひたり。是伊達林右衛門手船宜幸丸。其日も風あく。夜中沖北
方ふ漂ひしげ。ミカラライサンタラエチ。富五郎源七
ふいふ様。今度汝等ふ書簡を持たせて。松前ふ返せ
べし。其内二人ハ留置。本國へ連行。來年歸せ
なり。ふ詞も通ざるなきハ。書簡を持せ遣もしても
分るべし。擇捉の者共ハ。いまだ通辨も出來ざる故。

五郎次左兵衛を残し置ん。尤隨分大切よいとぞ。も
養ひ置づし。擇捉ふ居たると同じ事ふ思ひ。心を安
んじ。親元ふても案じざる様。書狀を遣まづしと。懇
ふ云含たり。翌二日ハ申酉の風ふてモせ行し。宗
谷とノツシヤブヒサ沖合ふ當て。日本船見ゆとて。
番人共と穴つ入。元船二艘ともモせ行。大筒二聲發
し。間もぬく日本船を見よといふ故。穴より出て見
きバ。松前家の手船吉祥丸ふて。乗組の人ハ見えば。
頓て彼船より長柄二筋。素麵二三俵。衣類の入たる
葛籠三つ。大船の方へ積取。小船の方へも。衣類等持

運ぶ駄み見えた。夫より又利尻の方へ乘戻した
る。同所より帆柱のなき赤船一艘見えた。

是則森重左仲内野五郎左衛門也。乗捨たりし万
春丸なり。

其時大船の方より乗出せしが頓て彼赤船より乗移
り。大筒を放ち一同より大聲を發し白地の木綿より黒
く文字附たる旗を押立。鎗一筋合藥焰硝の入たる
樽一つ。具足二領取來き。翌三日晝頃利尻嶋へ水
汲み行たる水主ども日本的小舟一艘挽來を見ま
バ。松前市中の船誠龍丸の縁船なり。同四日より至り

彼赤船より五百目許の大筒一挺。百目筒程の臺許。
焰硝合藥三升程。米數俵。酒五六樽。日本繪圖一枚。蝦
夷地圖一枚。唐太繪圖一枚取來き。此外衣類夜具
等。漁船へ積入たるべ。近くなうて覆り。皆海中ふ入
たす。夫ありヒヨウトロマルキチを始。五六人利尻
へ上陸し。番屋藏々ふても。燒拂たると覺えて。煙三
四ヶ所ふ見えて。誠龍丸ありも火の手上うぬ。万春
丸ハ夜ふ入燒拂ひたり。翌五日ふ至り三カライサ
ンタラエチ云様。赤船武器も積入らき。然るべき
大將も乗組たらん。利尻山へ立退たりと覺えた

モ。此大將を捕へあバ。番人共ハ殘らば返モベシ。い
ざや搜せとて。三十人上陸したモしが。晝頃返り來
りて。山ふハ一人も見えざる故。家藏圖合船等燒拂
ひ歸りたモといふ。夫ありミカライ富五郎源七を
招き。大將を捕得ざるふよう。先ふ云つる如く。彌汝
等ゲ内二人を留めて。八人を返モベシ。土産の爲何
ふても望の品ムラガ申べしと云。故素よう望の品
ハ何うざれども。歸國廿上露西亞の產物。何品を以
て交易を望やと。御尋もあらん時廿爲されば。羅紗
其外の切類少しづ。貰モヤと。仲間一同ふ商議し。

ミカライも申つる。是ないと安き仕事なり。爰より
有合ひる。去る年長崎へ見本も持行たる品みて。
古びたきども與ふべしと。卷物内あり裁て。羅紗六
切。露西亞織三切。花布二切。小切き八切。外も露西亞
文字の書籍二冊。頭巾一つ。コツフ五つ。鏡一面。角細
工一つ。内み針匙三本。露西亞仮名書たる物一枚。
繪圖五枚を與へたり。

此品々宗谷へ持來り。江戸表へ廻して。執政へ捧
ぐ。

渡船ふ。彼誠龍丸の船を貰ひ受しげ。船具不足もよ

う。櫂八本。碇一挺。綱二筋。帆一流を貰ひ。又船中の料
として。白米三俵。素麵一俵。醤油一樽。酒一樽。大藥罐
三つ。鉄一挺。鋸一挺。鉛二挺。鑿一本。煙草十玉を與へ
たり。其時ミカラライ。先ふ源七ヶ裏書したる書簡を
取出し。四隅を封たゞしき。又思惟する躰みて。此書
簡江戸へ出をべし。松前ふても一覽ある事なるら
んふハ。便ねうじせて源七ふ渡し。松前ふ至り奉行
ふ達せべしと云故。返簡ハ何地へ届くべきやと問
へば。來春唐太得撫擇捉の内へ来るべクキバ。彼三
島の中へ出をべしと。又通商の願ひ叶フ。上白中

青下紅の旗を立べし。我輩今年をオホツカへ歸帆
せねり。汝等相かまへて宗谷へ行事ぬく。速み松前
へ至るべしといふ。則其旨を得て出帆せしが。ざる
みても。赤人の宗谷へ行べくらばと云し。うど。彼所
ふハ御役人も詰たゞと聞及べバ。夫と指置松前へ
行バ。手後まふ成べし。いざや宗谷へ行人と。船中一
同ふ商議し。頓て彼方へ向てらせたりしげ。其夜宗
谷の内。ユウブツと云所へ至りしみよう。其處ふ野
宿し。翌六日の朝乗出し。一里許も行たるふ。靄の中
より帆影見えんる程ふ。そもそもや露西亞船の先へ廻

またるふや。いのぐへせんと驚しが。左をあくて。彼
万春丸ふ乗組たりし。地役雇の者共。彼船の成行
を見届とて。利尻指て行ふぞ有々る。かくて彼の者
共より。万春丸ハいあふと問ふ故。早焼捨たまと答
へ々れバ。然うバ利尻ふ行ても詮なし。宗谷へ歸る
べし。汝等も此船ふ乗きといふ故。則八人の者共。彼
船ふ乗移す。其日八時頃宗谷へ着く。深山宇平太を
初。同所の官吏ふ。事の始末を述さうといふ故。五月
十八九日の頃。彼等が乗組たる露西亞船。松前南部
箱館邊乘廻たる事ハなきや。其外ふ彼國より船の

出たる事ハ聞及ざるやと尋シ。其頃ハ唐太の邊
み居たきバ。松前邊乘廻したる事なし。露西亞より
此外船の出たる事も聞及ざきども。イギリス阿蘭
陀商船も出居たる由聞及びたりといふ。

是をイギリス阿蘭陀より出たる船おや。又ハ露
西亞より。イギリス阿蘭陀へ遣したる商船おや
と尋し。其所ハ恠と志らひといふ。然うバ五月
十九日。箱館へ見えたる大船ハ。是等の内みゆ
るべきや。さきどもイギリス阿蘭陀より出たる
船ならん。其頃南部箱館の邊乘廻し。下蝦夷地の

方へ行べき謂もなし。恐らくハ露西亞より彼國
へ行たる船の歸帆見るにてモハリシヤ未詳。
夫より大村治五平を尋る。彼と南部家の火業師
みて。擇捉嶋ふ詰合たる。四月廿九日異國船渡來
ふよう。詰合の官吏より差圖みて。足輕共を連き。會
所山上の草を刈取らせ。屯場を手當し。同家の火業
手傳役宮川忠作大畠忠平等ふも。夫々足輕を差添。
各鎗炮を持せ。防の用意をなす。桺戸田又太夫關谷
茂八郎申ふ。彼夷人ども何う申旨有て。來さるや
も知れざきバ。猥み鎗炮打事なく。彼等が事情を聞

を。専一とをばしとて。支配人陽助といふ者。玉ど
めのあるしを持せて。海岸へ進ませし。彼方より
大筒小筒を頻りに打掛け。陽助手負たるみより。今ハ
此方よりも打べしと申ふよつて。忠作忠平其外十
四五人。辨天社の脇へ出張り。各銃炮を打掛け。同異
國人の方あり。臺仕掛けの大筒を引上げ。嚴しく打掛け
たるふよう。治五平も十夕筒を以て打拂ひしげ。玉
薬盡たる故。取來んとて。會所へ行く途中みて。異國
人の銃炮ふ足の甲を打れ。陣屋ふ入。布ふて卷立た
き。どち歩行不自由ふて。防戦も心ふ任せざるふよ

う。會所川上の方の山岸よ。疵保養して居たる内。其
夜九時頃。會所の人數ハ引拂たりと聞々れど。歩行
なりがさきより。彼所ふ野宿し居たるよ。翌五月
朔日ふ。異國人ども上陸し。會所其外と亂妨し。二日
ふハ歸帆したる様子ふて靜むなり。病も少し和ら
ぎ々れば。會所の躰をも見届むやと。辨天社の後口
迄出たる所へ。川中の方よう赤人一人出來り。それ
日本と聲を掛。拔身を持打掛る故。治五平も拔合せ。
二太刀三太刀打合内。異國人六人程各鍼炮を向。取
圍みたる故。振返るにて坂の段木へ。疵ある方せ足

を踏うけ。横さまよ倒れぬきバ。異國人ども其儘折
重り。二の腕を繩みて縛り。會所脇土手の上へ引行
た。そちふ異國人二十人程も居て。藏々より米豆
等を運びたり。水一つくれあと。手真似して見せ
まきバ。藥罐ふ入持來う呑せたり。かく運盡て捕それ
た。まきバとて。首打てと仕形して見せたるふ。其内頭
立たる者。赤入ハ日本人を殺さば。頓て送り歸ら
べきさま手真似し。夫より腰繩を付け。サクソヘツ
比方つ四五丁連行。日本人々々々と指さむ其様。會
所の人數ハ何方へ立退たるやと。尋る躰み見えけ

る故。頭をふりあらびと答へば。又會所の人數ハ
何程と問ふ休みて。役人々々いづる事のみ聞えけ
る故。是又あらざる趣を。手真似して見せられバ。其
外いろいろ尋る様子ぬうしげ。分らざるゆゑ答へざ
リし。其後ハ何事も尋ねば。松會所の邊敵味方の
死骸なども見えば。異國人二人酒ふ醉たる躰みて
卧し居たりし。ハつ時頃彼二人と治五平と端
船ふ乗せ。大船一連行。繩を解穴へ入たり。そあふハ
唐太擇捉の番人共も居たり。程あく首領ミカライ
サンタラエチ。治五平と呼出し。船繩みて腰哉三重

廻ふ縛り。舳の方へ連れ行き腰を掛け。半時許置て繩を解。もとせ處へ歸したり。是も陸みて捕る。時刀を拔刃向ひたる故。一旦の咎なき共。そや構ふき由。ミカラライより源七へ申たり。又治五平を役人と心得居様子ふ付。町人ありと申ねしくきよと。源七へたせみ。漸々申取帳附の趣ふ成り。又異國人ども。源七其外の者ふハ咄もそれど。治五平ハ言語一向通せざる故。何事もいそび。夫よう彼得撫唐太等へ乗廻し。利尻みて番人共と俱ふ小船ふ乗組。宗谷迄歸たる始末ハ。富五郎等七八人びいふ所せ如し

といふ。且異國船の様ふ大筒仕掛け等の事。治五平
が見及びたる所繪圖もして出せしもよう。則江府
一捧ぐ。

一擇捉島ふ詰合たる同心の内。羽生宗次郎小嶋官藏
粕屋與七井瀧長藏橋本義八と云。五人此者共追々
箱館へ歸來れるふより。彼嶋爭亂の始末と尋るふ。
四月廿五日の曉。ナイボようせ飛脚紗那會所へ至
り。異國船渡來の由告來れり。關谷茂八郎彼所へ趣
みよう。宗次郎官藏與七井梅澤富右衛門と云者。都
合四人從ふべきよし。茂八郎よう申渡し。南部津輕

銃炮方の者三人。足輕二十六七人。大筒小筒の銃炮
と用意し。圖合船二艘も乗組。其日廿四時頃出帆せ
しづ。向ひ風ふて揃ぞうけ。夕方シイムイと云處へ
着寄り。野宿して居たる處へ。ナイボよりの飛脚の
由。蝦夷人兩人ふて書狀持來り。茂八郎其狀を見て。
彼飛脚を直ふ紗那へ遣した。何等の事云來りし
や。其子細ハ志らび。翌廿六日の朝出帆し。夜中も走
り行。廿七日の曉方ふ至り。ホロ々々といふ所へ着
寄りし。下役兒玉嘉内。ナイボ番人一人。蝦夷人六
人。此所の岩穴ふゆりていふ様去る廿五日ナイボ

上陸し番人四人と稼方の者一人を捕へ元船へ
連行。番屋藏々等焼拂ひたる由語るより。扱もナ
イボありハ。紗那の方心許なし。急て紗那立歸す
備つあひづして嘉内も此方の船ふ乗組。船子等
とせり立て急ぎし程ふ。其夜の中ふ紗那へ乘戻し
たり。翌廿八日の早天ふハ同心ども一同よ會所へ
出し。各手分して鏃炮玉を鑄立。竹鎗を拵へ。暮頃ま
でふ。大小の玉八百餘。竹鎗三百本程仕立。夜中を代
る。海岸と見廻り。翌廿九日は早天會所へ出しう。
戸田又太夫關谷茂八郎げいふ様。今度ハ安りらぬ。

珍事なまば。いづきも身命を抛て勤くべし。異國人
ども上陸したりとも。此方より差圖せざる内も。猥
み銃炮打べらば。駆引の合圖ハ。太鼓三つ打バか
ハ。四つ打ハ引ベし。兵糧方を兒玉嘉内引受て計
るといつぞ。猶廻り兼る事あらば。宗次郎も世話
まべしといふ故。其旨を得て。各銃炮玉薬等受取。宗
次郎ハ會所の上山手へ。蝦夷人二十人程連行草と
刈らせ。南部家の火業師大村治五平と。足輕二三十
人。津輕家の火業師姓名不知足輕二十人程連來り。同じ
く草を刈取らせ。凡八十間四方をどよ地とならし。

兩家。此幕張。亦會所。前土手上ハ。十間餘の所。へ三尺程板。と打。其内へ。南部家の幕張。長柄四十筋旗。一流纏一本。津輕家。みて。彼家。此勤番所。後遠見場所へ幕張。見張の者。と附置。各備戎設し所。ふ。九時前。ふ至モ。異國船二艘。來り。大船の方も。海岸より一里程隔て。十ヨカと云。沖の方へ。寄り船を留め。小船の方ハ。紗那會所。あモ二十丁程隔て。繫たり。扱異國人。ども何歎申旨。ひ。うて。來るや。知。さ。き。ば。猥り。ふ殺伐を用ひ。其事情を察。せし。先玉。ごめの合圍戎。せよと。又太夫茂八郎。より支配人。陽助へ促しぬれば。

則白木綿を三尺程木先へつけ。陽助是を持て海岸へ進む。其跡へ義八富右衛門官藏與七。并園田武右衛門といふ同心。いづきも鎌炮を持附添行。海岸へ至り。陽助彼合圍せ布を振たるふ。橋船より三百目許の鎌炮を。陽助へ向て打掛けたまひ。玉を脇へそれた。其時與七小筒を彼橋船へ向け一發しけるふ。陽助是を見て。今異國船より打たるを。玉筋ハ此方へ向たまひ。若や合圍の心なるらも知れざれば。先此方より船へ向て打んハいふ。山の方へ向け玉拂ひして。然るべしと申ふ。異國船二艘共銘

々車櫂を押立々る故。扱ハ合圍哉受たるならんと
思ひ居る内。異國人共皆々上陸したる故。會所へ行
て其旨を申けるよ。然らば異國人ども會所へ来る
べけきバ。もそや案内よ及むに。彼等がせん様を見
よやとて暫くためらひ々れバ。異國人どもハ。只海
岸立並ひたるせみみて。何の様も知れざる故。か
くてハ果じ。何と申旨もあらずや。參りて承るべきぞ
と陽助が申み寄り。然らば最前の如く同心どもへ
附添ひ行べし。若陽助を捕へなどせバ格別。左もな
きよハ努々銃炮打べりらばと。又太夫茂八郎申み

付其旨を得て一同打連濱邊へ進し。陽助懷中紙
を取出し。左右ふ振々玉止め仕方と見せけをどす。
會得せざるや頗る打掛くる故。進み難く引戻しづ
る時。小筒みて陽助が内股を打たるふより。其旨會
所へ申。鎌炮打べきやと伺ひし。今ハ打拂ふべし
と。又太夫茂八郎を初。南部家の人數と一同ふ。辨天
社の脇へ出張。筒先を揃て打立し。異國人どもハ。
川向北柏藏へ取籠り。鎌炮を打出す。よ。此方の
人數ハ。會所土手上へ引分け。左右よう打掛互ふせ
り。合居たる内。柏藏脇の蝦夷小屋より。夷人一人立

出し。敵の銃炮より死したり。又辨天社の下
ふも粕藏なり。官藏其粕藏の板を破りて。其所より
三百目筒を打出せし。異國人の籠うたる粕藏を
打抜。餘程色めきたる躰ふ見えたり。又南部陣屋の
山手より。同家の火業師大畠忠平三百目筒を。橋船
へ向け打出したる時。異國人共ハ彼粕藏ふ火を掛
て。

粕藏五六ヶ所焼たりと云。且津輕勤番所ハ敵ふ
取切られて。都合しきとて。此方より焼り。
一同橋船ふ取乗り。元船へ引取たり。此時七半時頃。

なり。夫よう一同會所へ集うし。兩家雇足輕を初
番人職人漁業稼方のも比。蝦夷人等悉く逃去り。兒
玉嘉内見えび。大村治五平も七時過より見えび。只
會所ふ居たる者ハ。又太夫茂八郎御用金と小者ふ
持せて立退かせたり。此用金國後と經て箱館へ來
る。暮時過より異國船ふて折々大筒の音聞ゆる故。
兩家の人數并同心ども海岸へ出。此方ようも打掛
たり。又太夫茂八郎兩家の役人一同ふ事と議し。
モモヤ玉薬を乏しけまば。此會所ふてハ防ぐたし。
一先立退。アリムイと云所の番屋へ引取べられバ。

同心共附添參るべしといふふよう。一同ふ引取る時。打殘たる合藥を取集め。南部家の火業師宮川忠作ふ渡し。同家陣屋の前ふゐる。一貫七百目の大筒を打せたり。

此玉敵の元船をかきむだる休みて。繫う場を遠ざけたり。

九半時頃。又太夫茂八郎宗次郎與七武右衛門富右衛門長藏。并森彦十郎大橋專藏といふ同心。銘々鍼炮を持。暁七時頃アリムイ番屋へ至り。間宮林藏百姓ふて。蝦夷地御用雇なり。海邊を見渡し。異國船一

艘大筒を打。此處へ寄來るべき体なりといふ。あく
らば爰ふ向うんも。然るべからびとて。同所と立出
行程ふ。皆々 跡先ふ成。五月朔日晝頃。アリムイとシ
ベツとの間みて暫く休うひ。かくて一同ふ勞き甚
しひきバ。今宵ハ爰ふ野宿しぬ。こそシベツへ往
め。と又太夫ぐいふより。木比枝などと折て火焚
焚。一同休居たる内。又太夫見えざるゆゑ。彦十郎傍
の山手へ登り見る所ふ。地役と同心共と此頃ハ
地役人と稱も 知らば。其様ぬやしきふより。一同ふそせ行見ま
そや事きれたり。其時擇捉ふ來り居たる鍛冶共。又

太夫。蒲團を持て居たる故。直。其蒲團を打きせ。
彼者共。番ふ附置。宗次郎ハ茂八郎を尋て。ルヘツ
比方へ。十四五丁行たきども逢ざる故。立戻見きバ。
番ふ置たる者。一人も居ざるふよう。扱もももや茂
八郎。來りて見届の上。番ふ附置たる者共。引連
行。そらんと思ひ。ベツをさして急ぎしほど。其
夜の初更頃。至り。彼所ふ着しげ。其所ふも茂八郎
其外の。も。見えざる故。扱もフウレベツの方へ行
しならむ。跡をあさひ行せやと思ひしげ。其所ふ大
河あり。川向ひ。船を見えされど。渡りべき夷人を

カラざれば是非なくルベツ。夜を明し。翌二日より夷人一人夷船より乗來りしと見受。其船より乗て川を渡り。漸々八時頃フウレベツへ至りたる。其所の蝦夷小屋。茂八郎林藏。并兩家の役人足輕雇。足輕稼方職入など。都合四十人程居たる故。又太夫自殺の始末を語りし。茂八郎も則其場所へ至り。様子見届たれども騒動の中故。死骸の取始末をなす。其所有有合たる者共々一同引連來し由をいふ。専藏與七八才サウシと云所より。海岸通うと行たる故。又太夫が變死をあらば。五月朔日夕方ふル

ベツへ着間もなく山の手方よう茂八郎彦十郎長
藏富右衛門武右衛門林藏。兩家の役人足輕其外の
雜人等。追々ふ來り。彼と共ふ又太夫ヶ事を初て
聞て驚嘆し。夫よりいづきも一同ふ。フウレベツふ
至り着ぬ。官藏ハ廿九日の夜。ナヨカロと云所へ異
國人上陸せしも計り難々れバ。見て來るべしと。又
太夫茂八郎がいふふよう。九時頃彼所ふ至り。南部
勤番の山おり又きば。人五六人居る体なう。闇夜ふ
て聴と分らざれども。異國人なるべしと思ひし故。
急て會所へ立戻りしげ。もや人一人も何うざる故。

後の山手八九町退く頃夜も明々れば。シベツ川の方へ十町程も行たる所へ。山手の方より兒玉嘉内及漁方の者五人出來り。きはふ嘉内が妻子。何方へ立退。行方をきざる故。所々尋居る内。海岸よう銃炮打掛け會所へ立戻難く。山へ籠り居たる由哉いふ。夫より嘉内官藏ブクシヤと云草の根。或ハ百合比根などを堀喰ひ。其所ふ五月三日まで野宿し。同日晝頃。川迄四五丁行し。蝦夷人七人居たりしが。其内あり二人矢を射掛たり。

是ハ野心有ての事ふもあらば。異國人共紗那亂

妨の紛き。此夷人共米酒等掠取たる事ありて。
其役人より其吟味ふ所もん事を恐き。かゝるある
まひぬりしと云。菊地總内先ふ箱館ふ出居た
ましげ。擇捉一舉ふ付。とく彼地へまうりし故。此
二人廿蝦夷ハシマツが仕方。輕からぬ事あれバ。よく糺
明をとげ申越せしと云おくりぬ。

彼蝦夷の内ノボリサニと云も。彼川筋二三丁上
のあせら小屋ふ。嘉内官藏と伴ひ養ひ置し故。此所
よ五日の朝迄居たりし。先ふ紗那會所よて。鎌炮
疵負ひする支配人陽助。此川上ふ保養して居たり

しう。異國人歸帆したる由を聞。紗那會所の様を見
んとて。嘉内官藏カニシキが居たる所へ來りし故。則三人一
同ふ紗那ふ行てみる。會所藏々南部家勤番所等
悉く燒拂たり。會所の後は草原ふ一人の骸あり。身
の内ふ疵なし。其所へ津輕家の雇足輕來り。是ハ彼
家の足輕ある。臆病みて果たりと云。又夫よう少
し腸。蝦夷小屋の前ふ。異國人死骸あり。黒羅紗筒袖
の衣服を着し。同股引をそき。切疵突疵矢疵あり。是
も夷人共集て殺たりと云。此始末前出つ。扱此三人又太
夫茂八郎が成行を知らば。アリムイの方へ行バ。逢

事ちらうんやとて。其日北晝頃彼所へ至る。爰より異國人の死骸疵等ちり。是ハ番人行十郎と云者。の殺たる由。此始末前時より見ゆ此處の山北手より。そからげも嘉内カニ的妻子。并津輕家の雇足輕四人。南部漁方の者五人。大工夫婦の者など出来り。先恙なきを悦合。一同圍合船より乗り。ルベツへ渡りて止宿し。六日の四時頃フウレヘツへ至りたる。茂八郎其外の者。蝦夷小屋より居する故。面會して品々談合しけり。義八ハ四月廿九日の暮頃より。紗那海岸を見廻り。五時頃會所へ立戻し。一人も見えず。其時

も陣場見廻りとして。一同出たる由の處。夫とハ志
らば立退たる事と心得。會所後手は山四五丁行た
る處。支配人陽助并番人喜總次。小使與太郎。漁方
の者十九人居たる故。其所みて夜を明し。五月朔日
同所を立てシベツみ至り止宿し。二日ふハ其川上
へ至りし。陽助ハ鎌炮疵。歩行成ゲ。さくれば漁
方の者負行しげ。笠原深く越難きふより。陽助喜總
次與太郎ハ其所ふ残。其外一同。三日ふハ八ヘ
ツふ至り。四日暮頃フウレベツへ着。茂八郎その外
のもけふ逢。夫より一同商議の上。一旦國後へ渡り

萬事を取調。茂八郎ハ品ふより。又擇捉へ戻るべし。
嘉内を初同心共。兩家の役人雜人等も箱館へ行べ
しと。茂八郎グ申ふより。同心共も是迄附添たる事
なきバ。達て留り度由を再三いへども。糧米等も乏
しく。萬端便なうざるふ付。是非ともふ登るべきよ
しを申ふよう。力及び出帆し。追々箱館へ至り着ぬ
といふ。

此申狀も悉執政方へ捧。爰ふハ一二の大要残舉
る也。且關谷茂八郎兒玉嘉内グ申狀ハ。正養グ
退役の後。進達ふ成りし故。今爰ふ記さば。

一七月十一日御使番村上監物義雄箱館着。上下三翌十三人
十二日御目付遠山左衛門景晉着。上下三人同廿六日
若年寄堀田攝津守正敦朝臣。上下三百三十七人 八月廿七日
正敦松前市中より海岸通り見廻り。中此節ハ異國
船も歸帆して靜謐ふ成。殊ふ旬季もあくれ。ともや
渡來も成難き時節み付。云々。

一九月十二日ハ順風みて。正敦初諸有司と俱ふ正養
も松前を發し。三廈一着。略下 休明光記

女嫁首參交。三更之晝。不一。杜門坐晚。奉天子事。
一六日十二日。即節同也。五更時。皆有同。之財。五者
則來。各無事。自當。也。其。也。其。也。

遇子歸。則方尋。蓋少姐。極。而。曰。李。也。以。其。多。也。
五娘。遇。前。市。中。也。也。承。也。見。也。中。也。謂。也。異。固。
其。半。者。遇。由。聽。取。安。五。身。時。日。三十。入。八。民。母。于。往。
十二。日。晴。日。廿。赴。山。玉。溝。門。景。晉。春。王。在。改。因。廿。六。日。

蝦夷風俗彙纂後編卷十大尾

明治十四年二月出板板權届

同十五年二月出板

開拓使

發行書類

東京本郷弓町二丁目八番地

製本所
臨池社

東京日本橋區通一丁目

稻田佐兵衛

槻本西

京橋區南傳馬町一丁目

發兌書肆

吉川半七

岩代國安達郡二本松

太田勘助



